

# 養護教諭のニーズに関する研究

—教員・保護者への調査と養護教諭への調査から—

加藤 美智子 (G180002)

指導教員：土田 満

キーワード：養護教諭，ニーズ，職務，役割，悩み

## はじめに

社会環境や生活環境の急激な変化は子どもの心身に大きな影響を与え、これらに対応するため、養護教諭の果たす役割も時代のニーズとともに変化している。

養護教諭への周囲からの期待や要求（以下ニーズとする）については、養護教諭が認識する周囲からのニーズに関する研究、教諭・管理職、保護者、児童生徒を対象とした研究が先行研究としていくつか報告されている。これらの調査は、対象をそれぞれ別々に設定して実施されたものであり、養護教諭、教員、保護者の三者を同時に比較検討したものは見あたらない。養護教諭に求められるニーズを的確にとらえることは、養護教諭の多様化する職務や自身の保健室経営を見直すことにつながると考える。

以上を踏まえ、学校保健活動を円滑に推進することを目的とし、養護教諭が周囲から求められているニーズと養護教諭自身が認識するニーズについて検討した。

## 方法

### 1. 対象者及び調査期間

愛知県A地区養護教諭73名、愛知県B市内公立小中学校教員（約300名）及び、保護者（各校約50名）を対象とした。期間は令和元年6月～8月である。

### 2. 調査内容及び分析方法

養護教諭は研修会で、教員と保護者は各学校に調査用紙を配付した。内容は属性、養護教諭が認識する周囲のニーズ、養護教諭の悩み尺度から構成した。

### 3. 倫理的配慮

質問紙の返却と同意で協力の意思を確認した。愛知県みずほ大学研究倫理審査委員会の承認を得た。

## 結果

養護教諭67名（有効回答率91.8%）、教員266名（97.8%）、保護者626名（93.2%）を対象とした。

### 1. 対象者の属性

#### 1) 養護教諭

20代、30代が約50%、50代以上が34%を占めていた。経験年数は19年以下が約70%で、児童生徒数499人以下の学校に70%が勤務し、1日の来室者数は20人以下が殆どで、ほぼ全員に困ったときの相談者がいた。

#### 2) 教員

女性が約60%で50代以上が最も多く、経験年数は10年以下と、30年以上が約40%を占めていた。勤務校は小学校が60%、児童生徒数299人以下がほぼ半数で、担任ありが約60%、管理職は12%であった。

#### 3) 保護者

女性が90%以上で、年齢は30代が20%、40代が68%で、子の人数は2人が56%、次に3人が26%であった。養護教諭に相談したいと思ったことがある者が12%と少なく、実際に相談した者は10%以下であった。

## 検討1. ニーズの高い役割とその内容について

カテゴリー別（図）の「非常に行ってほしい」の割合は、救急処置、感染症予防が50%を超え、次いで健康相談等に続いていた。養護教諭では、救急処置、疾病の管理、個別支援が高く、教員では保健教育、保護者では感染症予防、健康相談、コーディネートで高かった。疾病の管理、健康相談、保健教育、個別支援、コーディネートでは、すべてで50%を下回っていた。

## 検討2. 立場と養護教諭へのニーズとの関連

### 1. 養護教諭のニーズに関する尺度の主因分析

主因子法・エクサマックス回転により因子分析した。第1因子は「個別支援とコーディネート」、第2因子は「健康相談活動」、第3因子は「感染症予防」、第4因子は「保健管理」、第5因子は「保健教育」と命名した。

### 2. 立場とニーズ尺度との関連

因子得点を用いて分散分析を行った結果（表）、「個別支援とコーディネート」を除いた他の因子にはいずれも養護教諭、教員、保護者の3者間で有意差が認め

られた。多重比較の結果、「健康相談活動」「感染症予防」は、養護教諭と教員よりも保護者のニーズが有意に高かった。「保健管理」は、保護者より、教員、教員より養護教諭のニーズが高かった。「保健教育」は、保護者、養護教諭より教員のニーズが高かった。

検討3. 養護教諭へのニーズと種々の要因との関連

養護教諭の年齢、経験年数との関連では有意差は認められなかった。小学校の方が健康教育のニーズが有意に高く、兼職発令を受けていない者で健康相談活動のニーズが有意に高かった。

教員の年齢との関連では、個別支援とコーディネートは20、30代のニーズが有意に高く、感染症予防では50代以上が高かった。保健教育では50代以上が20、30代より高く、勤務校種との関連では、感染症予防、保健教育は小学校が有意に高かった。

保護者の性別との関連では、個別支援とコーディネート、感染症予防は、女性のニーズが有意に高く、保健教育は男性が高かった。子の人数との関連では有意差はなかった。また、養護教諭に相談したいと思ったことがある者のニーズが思ったことの無い者より有意に高く、実際に相談したことがある者も同様であった。

検討4. 養護教諭の悩みと種々の要因との関連

1. 養護教諭の悩み尺度の因子分析

主因子法・プロマックス回転による因子分析した。第1因子を「養護教諭の力量」、第2因子を「校内での立場」、第3因子を「研鑽の機会」と命名した。

2. 養護教諭の悩みと属性との関連

年齢との関連では、20代、30代の力量の悩みが50代以上より有意に高く、経験年数でも19年以下の者の力量の悩みが高かった。児童生徒数では、300人から499人の者の悩みが高かった。1日の来室者数との関連では、来室者10人以下が力量の悩みが有意に高かった。1種免許所有者が2種免許より校内の立場が高かった。

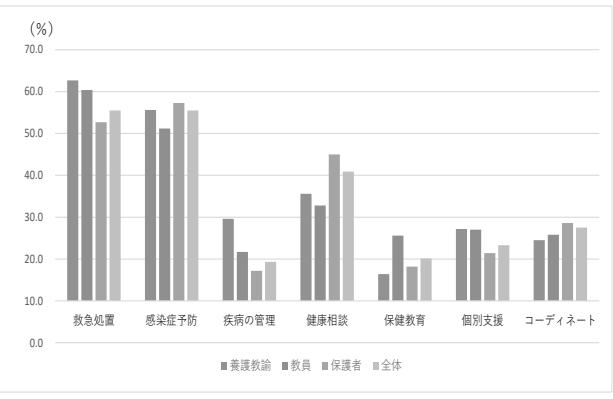


図 養護教諭のニーズの内容別「非常に行ってほしい」の割合

検討5. 養護教諭のニーズと養護教諭の悩みとの関連

保健教育のニーズを高く認識している養護教諭は、「養護教諭の力量」と「校内での立場」の悩みが有意に低い傾向が認められた。

考察

検討1では、救急処置、感染症予防に関する項目において「非常に行ってほしい」の割合が高かった。養護教諭誕生の歴史的背景から、これらの項目は時代が変わっても養護教諭の重要な職務であることが推察される。保護者からのニーズでは健康相談、コーディネートの項目が高く、養護教諭の認識するニーズとの差が認められた。養護教諭の年齢、経験年数が低く、また力量不足等により保護者からのニーズを適切に把握できていないことが考えられる。コーディネートは、養護教諭に重要な役割であるが、実施指針が不透明で、外部機関との連携の窓口は管理職が行っている場合が多いことも養護教諭の認識が低い要因と推察される。

検討2から、保護者からの「健康相談活動」「感染症予防」のニーズが教員、養護教諭より高かった。子どもたちの健康問題の中で、いじめや不登校など心に関する問題が多く、その相談窓口として養護教諭への期待が高いことが推察される。

検討3より、小学校に勤務する養護教諭の方が「保健教育」において高いニーズを感じていた。小学校では保健指導の機会が多く、直接子どもを指導することで、期待感を感じていることが推察される。

養護教諭へのニーズと教員の年齢との関連で、「個別支援とコーディネート」が、40代以上の教員においてニーズが高かった。年齢が高くなるほど養護教諭と連携の重要性を認識していることが推察される。

検討4から、20、30代、経験年数19年以下の養護教諭に「力量の悩み」が多いことが認められた。養護教諭にとって経験が重要であることが示唆される。

周囲からのニーズの違いを認識し、真摯に受け止め、対応していく重要性が示唆される。

参考文献

1) 文部科学省：中央教育審議会答申 2008  
2) 塚原加寿子ら：日本養護教諭教育学会誌 21(2) 2018

表 立場によるニーズの差

因子名	養護教諭 (1) (n = 67)		教 員 (2) (n = 266)		保 護 者 (3) (n = 626)		有意確率	多重比較
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
個別支援とコーディネート	-0.07 ± 0.83	-0.06 ± 0.93	0.03 ± 0.92	n.s.				
健康相談活動	-0.28 ± 0.76	-0.34 ± 0.82	0.17 ± 0.88	**	(1, 2<3)			
感染症予防	-0.08 ± 0.70	-0.14 ± 0.91	0.06 ± 0.94	**	(1, 2<3)			
保健管理	0.72 ± 0.60	0.28 ± 0.80	-0.19 ± 0.90	**	(1>2>3)			
保健教育	-0.21 ± 0.91	0.25 ± 0.89	-0.08 ± 0.87	**	(2>3, 1)			

n.s.: not significant, \*\* p<0.01